



創立100周年

関西大学通信

THE KANSAI UNIVERSITY NEWS

第151号

昭和61年(1986年)1月16日

関西大学広報委員会
大阪府吹田市山手町3-3-35



＜創立50周年記念絵はがきについて＞この二枚の絵はがきは、昭和11年5月、関西大学が50周年式典を迎えた折、当時の学舎の姿を納めた写真版の絵はがきと3枚1組で作られた懐かしい資料。筆者鳥海青児氏(本名正夫。1902-72)は、大正15年本学経済学部を卒業した異色の洋画家で、重厚な画風で日本的な油彩画の典型を創り出した人として知られる。生涯旅を愛したこ

の画家にふさわしく、画因は、フランドル出身のフェルビースト(Ferdinand Verriest. 1623-88. 中国名は南懷仁)の著した有名な「坤輿全図」ととったもので、その日本の部に、文化の源泉であり、希望の象徴である浮宝(船の美称)を配したあたりが絶妙というべきか。原図のもつ感じと美しさをこわさぬよう、構図と彩色に細心の注意と苦心を払った傑作。

新春に語る

学長 大西昭男

明けましておめでとうございます。学長ご自身にとり、今年ほど、あらたな年たちかえるという感慨を深くされているお正月もありませんか。昭和元年のお生まれですから、本年が還暦、奇しくも、関西大学の百周年と重なるわけですが、えにしようなものを感じておられますか。

「私、つくづく思うんですよ、人の一生は、運、運に左右されることが大きいな、とね。そして、運のことくを構成しているのは、人との出会いだな、とね。恩師や友人をはじめとする、さまざまの人とのふとした何でもない思ひもかけぬ出会い。それのおかげで、自分の人生行路が誤った方向にならなかつたのだとすれば、こんなありがたいことはない。故人であれ、健在の人であれ、そのような人ひととの貴重なめぐりあいに、日々感謝の気持ちでいっぱいなんです。

関西大学にも、百年という歴史を構成してきた無数の出会いが蓄積しているはず。文字通り、寺小屋から始まったひとつの大学が、百年の間、いづれを構えてきたことと幸運、私も私なりに人との出会いを支えられて生きてきて、無事還暦を迎えることのできる幸運とが、いまこの瞬間に重なりあうことのでき、しみじみ、すなおに喜んでおります。」

しかし、一年の計を元日に立てて、正月休みをゆつたりとした気分を過ごすなどというところでもないほど、多忙な毎日がつづいておられるよう。

「私自身も大いに反省しなくてはならないのですが、どうも、大学は、きせわしきまますね。何かにつけて、近代日本の歩みのままに、いまだに追いつけ、追いつけのせつかなせがけが抜けぬ。時代の先取りを意識しすぎですね。息づかいが荒っぽいのは困りものです。当世はやりのしゃべり漫才調の早いテンポの呼吸、ばかり気にしていいのだろうか。もう少し、落語ふうの「間」のとり方を大事にしたほうがよいのでは、おっとりとした、悠揚ゆたかめ、ペースを保てないものか。

いわゆる大学行政には、長年の懸案事項にせよ、集積の問題にせよ、それらを常に全体の合意が得られるようなかたちで、しかもなるべく早急に解決しなければならぬという目前のタイムリミットというものがあつた。それが大切なことはいまでもないけれど、誤解を恐れずにいわせておらねば、現実のタイムリミットにせがけられながらも、それをこえて、新たなタイムリミットを設定して行こうとする自立たゆ努力こそ、肝要ではないか。

研究や教育には、本来タイムリミットはあつてはならないし、あるはずもないです。絶えざる持続的研究こそ、学問の真髄ではないか。それがいかに重要なことを私たちがはたしきさのなかで、あるいはまた、心の余裕のなさから、忘れることが多い。今や、百年の年輪を刻む関西大学には、それ自体にふさわしい独自のペースがあつてよい。研究や教育を培ってきた、そしてこれからもそれを育んで行くはずの、かけがえのない地下水脈は、なかなか一挙には浮上してこないですから、ついつい眼前に山積する問題の処理に追われ、それに成功すれば、能事終われりとする。今の日本の大学が陥りやすいこの悪癖を何とか是正したいですね。」

「真のゆとりがあつてはじめて、本物の研究や教育も花を開き、やがて実実を結ばせ、人ひとの心もなごみ、そうしてゆるぎのない自信と安心が生まれてくる」といふことでしょうか。

「学問の府としての大学だけでなく、個々の人間においても、その人が魅力ある個性でありうるかどうかは、内部にとだけ地下水脈をもっているかにかかってくる。どれほどいきいきとした伏流水をたたえいるか。とくに学生諸君に向かっていふならば、やはりこういふことがないですね、いろいろな本をむしむしに読んでください、と。本を読む人は、人を読める、ようになる。自分の当面する世界以外の世界をたくさん知ろうとする人は、自然、想像力が豊かになるし、人の心も読めるようになる。人間に奥行きが出てくる。長い眼で見れば、このような地道な努力は、将来、必ず真価を発揮します。心ある人の声なき声に耳を傾けることができるようになります。やさしく思いやりのある人間になれる。」

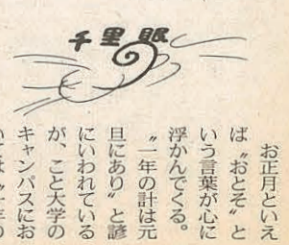
私が、広い意味での、真実の社会人教育を重視するのそのこと関係があるのです。明治のころ、日本は国民皆教育の促進に精を出してきただけで、教育が普及し浸透すればするほど、皮肉なことに、学校を卒業するまでの教育が重要であつて、学校を終えたら勉強しなくてもよいという残念な空気が一方で漂い出すのを見えた。しかし、日本人は反省するのめ早く、時間とお金に多少の余裕が生じるにつれて、メディアは何であれ、知ること、学ぶことに積極的に取り組む姿勢も着実に増大しつつある。これはたのしいことですね。

「好学者の人、知ること、学ぶことをもめとめる人ひとの集う大学として大きく飛躍するための活力の導入には意欲的でありたいですね。無茶をするのではなく、大胆で思い切りのよい発想を生かしたらと願っています。何度でもいいますが、百年も経った大学なんですからね、未熟なところもいろいろあるとは思いますが、底力は備わっていると思っております。」

「巷では、二十世紀であれ、昭和であれ、ひとつの時代の終り方に関心が集中しているようですが、関西大学はずでして新たな出発の時を迎えているのだ。」

「私たちは、もはや新世紀に向かって確実に歩み出しているのです。これまでの二世紀の歴史に重圧を感じることなく、はじめにも申した通り、悠々と進んで行きたいですね。関西大学に住まうすべての人ひとと、百周年を共に迎えることのように心を謙虚にわかちあつて、次なる新世紀に心を弾ませながら、突入して行きたいと念じております。」

—学長が胸中ひそかに抱いておられる、初夢、が正夢になることを祈っております。



お正月といえは「おとそ」という言葉が心に浮かんでくる。「一年の計は元旦にあり」と諺にいわれているが、こと大学のキャンパスにおいては、一年の計は春四月にあり」とのスケジューリングで行事が運ばれており、冬休み明けは正月気分もふつとび、学年末試験、入学試験、卒業式と大きな行事に向かって進んでいく。とはいえ、世間なみにとおそそ気分をゆつくり味わいたいものなり。日本人いや人類にとりて酒は人生においてきつてもきつめ結びつきがあることはいくらでもない。日常性を脱却すべく手軽な方法としてアルコールが最も身近なようである。そういつた逃げとしての酒ではなく、酔心の世界を極めるといふことも酒党にとって大きな楽しみなり。しかし最近にいたってアルコール依存症なる言葉が流行するところとなり、タバコ党のみならず酒党にとつても肩身の狭い昨今なり。ここは一つおとそ気分を初夢といきたい。明治十九年(一八八六年)、関西法律学校として誕生した関西大学が名実共に大学に昇格したのは大正十一年(一九二二年)。その年、わが国にはじめてウイスキーが輸入されたこと。今日の日本社会においてビール、ウイスキー、焼酎、ワイン、日本酒と国際色豊かな中で酒党は日本文化を反映するかの如く和洋折衷の知恵をバランスよく身につけているらしいが、日本酒、ビールが王座を占めていることはいままででもない。百薬の長たる酒を愛し、米と麦のエキスを吸収して健康増進といきたい。十一月二日の百周年記念式典へ向けて準備が着々と進められていると聞く。一つキャンパスで当日学生にアルコールを飲み放題ふるまうてあげては如何なものか。そして、学生、校友、教職員共々腹をおつて関西大学の今後百年の計を語り合うのもいい計だと思つのだが。(K-1)

座談会

出席者 社会学部助教授 木村 洋一
社会学部助教授 多喜 弘次
社会学部専任講師 松原 一郎
社会学部専任講師 架場 久和
社会学部教授 池田 進

現代若者考

あこう婦人大学講座から



木村 洋一



多喜 弘次



松原 一郎



架場 久和



池田 進



「現代若者考」パネルディスカッション

演技の中に真実

テレビと一緒に戯れて

若い人たちのテレビ好き
「現代若者考」パネルディスカッション
演技の中に真実
テレビと一緒に戯れて
木村 洋一

変わってきた恋愛観

「らいり」の時代へ

素顔と仮面は同列に存在

素顔と仮面は同列に存在

変わってきた恋愛観
「らいり」の時代へ
素顔と仮面は同列に存在
素顔と仮面は同列
「らいり」の時代へ
素顔と仮面は同列
素顔と仮面は同列

